

アンタゴニスト法で排卵抑制にレルミナ錠使用の有効性について

徐クリニック ARTセンター

徐 東舜、伊藤 真理、峰 千尋、中塚 愛、越智 雪乃、清須 知栄子

【目的】調節卵巣刺激の際のアンタゴニスト法では、排卵抑制に Gn-RH アンタゴニスト（セトロタイド注射用：メルクバイオフーマ株式会社あるいはガニレスト皮下注：MSD 株式会社）が使用されてきた。これらの製剤は痛みや費用の点で負担が大きい。最近、子宮筋腫の治療薬である Gn-RH アンタゴニストのレルゴリクス（レルミナ錠：武田薬品工業株式会社）が認可された。今回我々は、患者負担の少ないレルミナ錠をアンタゴニスト法での排卵抑制に使用したので、その効果を報告する。

【対象】2019年3月～2019年9月の間の調節卵巣刺激にアンタゴニスト法使用予定患者に対し、レルミナ錠の使用を説明しインフォームドコンセントを得られた84症例を対象とした。

【方法】いずれも調節卵巣刺激法は hMG アンタゴニスト法で行った。月経周期3日目から hMG225～300 単位を投与し、卵胞径が 12-14 mmに到達した時点よりレルミナ錠を 22:00 に連日内服し、18 mm以上の卵胞が3個以上発育した段階でトリガー（オビドレル皮下注：メルクバイオフーマ株式会社もしくは Gn-RH アゴニスト製剤の Lucrin：AbbVie）を投与した。トリガー投与後36時間後に採卵を行い、採卵後7日目まで胚培養を行った。

【結果】いずれの症例においても LH サージの発現や採卵時の排卵は認めなかった。調節卵巣刺激の結果は hMG の投与量は 2328.6 ± 522.6 mIU/ml、レルミナ錠の投与日数 3.1 ± 0.9 日、トリガー投与日のホルモン値は E2 2603.4 pg/ml、P4 0.75 ng/ml、LH 1.1 mIU/ml であった。採卵および胚発育の結果については、採卵個数 8.0 ± 4.9 個、MII 率 87.3% (330/378)、受精率 80.0% (536/670)、採卵後5日目での胚盤胞率 62.7% (336/536)、ガードナー分類で 3BB 以上の良好胚盤胞率 28.0% (150/536) であった。

【結果】レルミナ錠は注射薬の Gn-RH アンタゴニスト製剤と同様に調節卵巣刺激の際の排卵抑制の薬剤として有用であることが明らかになった。